りびんぐらいぶず　令和3（2021）年1月第1号

聞名→澄浄→随念の流れに聞く

◆ご讃題

（梵一八）もしも、世尊よ、わたくしが覚りを得たときに、他のもろもろの世界における衆生たちが、無上なる正等覚に向けて心を起こし、わたくしの名を聞いて、澄浄な心をもってわたくしを随念するとして、もしかれらの臨終の時が到来したときに、（かれらの）心が散乱しないために、わたくしが比丘僧団によって取り巻かれ恭敬されて、(かれらの)前に立たないようであるならば、その間は、わたくしは無上なる正等覚をさとりません。

（梵一九）もしも、世尊よ、わたくしが覚りを得たときに、無量・無数の仏国土における生ける者たちが、わたくしの名を聞いて、かしこの仏国土に対して心をかけ、（そこに）生まれるためにもろもろの善根を差し向けるとして、かれらが、一無間(罪)を犯した者たちと正法を誹謗するとい障碍に覆われた生ける者たちとを除いて―たとえ十たび心を起こすことによってでもかしこの仏国土に生まれないようであるならば、その間は、わたくしは無上なる正等覚をさとりません。

（Ref『無量寿経梵文第十八願』藤田宏達訳 p78）

◆はじめに

サンスクリット(梵)本では、仏説無量寿経の第十八願と第十九願(第二十願)が梵第十八願(梵第十九願)に各々一体化され、本願文が二願となってしまっていますが、梵第十八願のうち、無量寿経第十八願相当部分は却ってその本質が明確化され分かり易くなっているように窺われます。

「無上なる正等覚に向けて心を起こし、私の名を聞いて、澄浄な心をもって私を随念するとして」がそれです。

- 菩提心を起こして→

① 阿弥陀仏の名を聞いて(聞名し)、→

② 澄浄な心(信心)をもって、→

③ （諸仏）に随念（付き従って）してお念仏し、がその流れだからです。

◆聞名→澄浄→随念の流れに聞く

ご常教のキャッチコピーは、「信心正因　称名報恩」であり、聞名が全く捨象され、十念について触れておらず、今日では到底分かり易いとはいえません。

幸い、梵本訳文は現代語ですのでこれを参考に頂戴してみることに致しましょう。

◆はじめに「菩提心を起こす」とは、菩提心には、願作仏心(自利)と度衆生心(利他)があるので、これらを起こそうと思いたつことを申します(Ref 聖典巻末註)。

但し、菩提心を起こすのは、不善作悪者には当らないので第十八願の救いの目当てというよりは、第十九願相当の救いに当たります。

◆①**「阿弥陀仏の御名を聞く」**とは、

阿弥陀様のお名号が何と尊いことであろうかと、諸仏（今生では、お釈迦様）がご讃嘆なさり、他力の念仏者がこれに付き従って、「何と尊いことよのう」とお称え下さいます。お名号の尊さをお称え下さるお念仏をお聞かせに与ることを「名を聞く」「聞名する」と申すのであります。

衆生が初めから讃嘆のお念仏を称えられる訳ではありませんが、阿弥陀様が衆生を救いの対象として、お念仏する身にまでお育て下さり、念仏者が「私のような者がお救いの目当てとなる」との謙譲心から自らを顧み、如来様の御働きを今更ながらに尊ばせて戴くときには、お姿を仰ぎお喚び声に目覚める「**讃仰**（さんごう）のお念仏を称えさせて戴いております。

◆②**「澄浄の心をもって」**とは、お名号をお聞かせに与って信心の本体(信体)である「澄浄な心」を頂戴することを申します。伝統教学では、信心を、信心を戴くときの姿、「信相」で語るばかりで、「信体」で語ることがありません。滅多にご紹介できる機会がありませんが、宝石山正覚寺の山号「宝石」は、お名号を衆生が信心として賜る「信体」を指しての呼び名であります。

◆③**「諸仏に随念して」**とは、お念仏は、他力の念仏者のお称え下さる姿に導かれて付き従って初めてできる尊い如来様の大行であります。

「諸仏に随念して」から「澄浄の心」を戴くまでは、賜ったお念仏を繰り返し称える**「メディテーション(三昧)」**であります。

信心獲得前のお念仏を一律自力として排除するのではなく、「如来様から賜ったお念仏であることを繰り返し言い聞かせつつ讃仰して称えるお念仏であります。

◆マインドフルネスメディテーションという上座部仏教(南伝仏教)に云う瞑想用語がありますが、阿弥陀様から賜ったお念仏として繰り返し自らに言い聞かせつつ称えさせて戴くときには、決して上座部プロパーの行ではなく、浄土真宗の立派なお念仏の姿であると云って差し支えがないと云えるかと窺われるのであります。

「マインドフルネス」とは、何かといえば、過ぎ去ったことをくよくよするのではなく、これから先のできことを未然に案ずることでもなく、唯今の私に精神集中することであります。

お念仏は、如来様から賜ったお念仏であると自らに言い聞かせつつお称えする姿は「三昧」自体が立派に変容を遂げた姿ではないかと窺えるのであります。

集中して称えれば、今生の真っ只中で如来様のお喚び声になって聞こえて下さることは私達の経験するところです。

◆信楽 峻麿先生は、親鸞聖人は、称名の道とは、元々本願文において、「聞名の道として明かされるものであって、私から仏への方向において成立する称名は、そのまま、仏から私への方向に置いて成立する聞名でなければならない。ここにこそ、無量寿経の第十八願文の根本意趣が在ることを開顕された。

即ち長い無量寿経の伝統における称名の道を、そのまま聞名として捉えて、私のような不善作悪の者、極悪深重の悪人は、阿弥陀仏と出遇い、それを宗教体験するためには、ひとえに、私にかけられている仏の喚び声を聞く他はないが、その喚び声を聞くについては、専ら、ただ称名念佛することによってこそ、よくそれを聞くことができると明かしておられると仰せであります(Ref『教行証文類』第四巻 P114)。合掌。

◆仏壮総会一月十七日（日）十八時、◆役員会　十九時～
◆仏教婦人会例会一月十六日（土）十三時より
◆初講　一月三十一日(日)十時

著作編集兼発行元（本願寺派 正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥